

井伊直助はいかに決断したのか

1853 黒船が来航、開港と通商を求める

幕府を守ろうとして登場したのが井伊直助、しかし、天皇を頂点に尊王派、攘夷派が自らの意見を通すためにいろいろ画策する。その中で岩瀬・井上らの官僚たちは「開港」の結論はでており、それを誰にやらせるかという状況になっていく。

*このころ幕府は鎖国の中でも長崎から海外のニュースを得ており、アジアの動きがどんな状況にあったかかなり把握していた。井伊直助は意見書を出しているが、その内容は軍備を整え海外に出て、交易による富で富国強兵を唱えている。

*彦根藩 35 万石の 14 男として直助は生まれ、36 歳で藩主となる。領民を思いやる政治を行い、吉田松陰はこれを称賛している。

*水戸 35 万石藩主徳川斉昭は尊王派のリーダー格として、大砲を幕府に献上するなどして攘夷派と対立していた。

1854 日米和親条約を締結

*ペリーが 7 隻で再び来航 → 1854 日米和親条約を結ぶ。その 2 年後ハリスが下田に来る。このころイギリスは清国と戦争して、アジアの植民地化政策を進めようとしていた。

*これらの情報を得ていた井伊直助は、ジャカルタで交易をやると書いている。

*1857 ハリスは将軍家定に謁見 → 攘夷の聲が高まる → この時井伊直助は天皇の許可をとり、徳川斉昭を抑えようとする。しかし、孝明天皇は結論をだすとその責任をすべて負いかねないと考えて「諸大名で十分議論して、もう一度奏上せよ」 → ここで井伊直助は大老に抜擢される。つまりは、誰かがやらなければならない役を受け持たされたことになる。

*その 2 カ月後、ハリスが会談を求めてくる。英仏が清国に勝利した、次は日本を狙ってくる。その前に米国と有利な条約を結ぶべき、と主張。

1858 通商条約調印

*直助の考えは、天皇の勅許を得て調印すべき → 水戸の了解を得るべき → しかし、ここは天皇の勅許を待たずに条約を結ぶべき(天皇の意に背くことになるが)

*ところが、孝明天皇は異国船が来ないことを願う歌を詠んであちこちにばらまいていた。

*1858 通商条約を天皇の勅許を得ずに調印。その批判はわれ一人で受ける決意。しかし、「公用方秘録」には天皇の勅許を得ずに調印したことは、自分の落ち度と記されている。

*調印を知った諸大名は江戸城へ → 諸大名は直助を糾弾・天皇も怒り公武合体して当たれと、幕府より先に水戸藩へ下した。 → 直助はこれに反撃・100 人を捕え 8 人処刑(安政の大獄)斉昭は蟄居、吉田松陰も死罪 → 水戸の過激藩士脱藩 → 桜田門外の変(18 人の水戸藩士など)井伊直助暗殺